

第52号

● 目次 ●

巻頭言：地域研究における文理共同研究の一方	1
最近の研究会・講演会等	2-6
センター客員教授紹介	5
著書紹介	6-7
活動風景：震災からの復旧	8
編集後記	8



巻頭言

地域研究における文理共同研究の一方

東北アジア研究センター 副センター長 奥村 誠



本センターは、東北アジア地域を対象に地域研究を行うために、人文系、理学系、工学系の研究者が学際的な研究を進めることを目的として設置された。しかし残念ながら、「文理融合」の看板に見合う具体的な成果が上らないまま、外部評価のた

びに説明に苦しむという状況になっている。これは、なぜ「文理融合」をしなければならないのか、「文理融合」をすることによって何が可能になるのか？が十分に議論されていないことが原因であると思う。この6年間の東シベリアを対象とする文化人類学との共同研究活動の中で、文理共同研究の意義がおぼろげながら理解できるようになってきたので、ここで私見を述べたい。

人類学をはじめとする人文科学は、おもに地域における人間や人間の集団、社会の中で経験的に蓄積されてきた「経験知」を調査し、整理し、概念化するという役割を担っている。このような経験知は、先見の正しさや論理性に基づいて設計されたものというよりは、その人間集団や社会

が自然環境や社会環境との相互作用を繰り返す中で、試行錯誤的、帰納的に獲得されてきたものであり、地球温暖化などの環境変化の中で今後もその知識が有効に働くかは不確定である。言い換えれば経験知には「内挿はできても、外挿ができない」という特徴がある。一方理科系の学問が立脚している数学や物理学は法則性の成り立つ範囲が広く、異なる状況下に敷衍して当てはめることができる。つまり、シミュレーション計算を行って外挿することが可能である。また頻度が極めて低く、一生に一度経験するとは限らないような大規模な自然災害などについては、実経験のない世代の人々に「経験知」を伝えることは困難であるが、科学的な知識の形に翻訳することで、継承が容易となる。その反面、理科系の分野では基礎理論の自由度が広すぎるために、「何に対して理論を当てはめるべきかがわからない」という問題が生じる。

したがって現地社会での関わりの中で文系研究者が経験知を発掘し、理系研究者がそれに科学的、論理的な裏づけを与えることで知識の適用範囲を明らかにすれば、変化する環境の中に知識を残して継承していくことにつながる。これが、変化の時代の地域研究における文理共同研究の一つの形ではないだろうか。

最近の研究会、講演会等

東北大学東北アジア研究センター公開講演会

「途絶する交通、孤立する地域 ～ 人と地域の対応」

毎年恒例の東北アジア研究センター公開講演会が、平成23年12月3日(土)、仙台市戦災復興記念館を会場として開催された。

本年は、昨年3月の東日本大震災でも問題となった交通の途絶と、これによる地域の孤立の問題を取り上げ、三人の講師による講演と、コメンテータによるコメントが行われた。まず最初に藤原 潤子氏(総合地球環境学研究所)は、「途絶化するシベリアの村：社会変化と環境変化」と題し、氏がフィールドとしているロシア・シベリアを取り上げ、社会主義体制崩壊後、市場経済へ移行する中で交通の途絶によって大きな変化を被っている地方の村の状況を紹介した。次の講師植田今日子氏(東北学院大学教養学部)は、「橋



講演会場の様子

が架かったシマの再離島化 ―沖縄県今帰仁村古宇利島の事例―」と題して、離島であった沖縄県今帰仁村古宇利島が沖縄本島と橋で結ばれたことによって生じた伝統的な生活習慣や信仰などの変化を紹介した。最後に奥村誠氏(東北大学東北アジア研究センター)の講演「東日本大震災後のガソリン途絶への対応行動」は、東日本大震

災時におけるガソリン供給に生じた途絶現象への消費者の対応を分析しながら、被災時の効率的な供給の可能性について考察するものであった。最後にコメンテータ・神谷大介氏(琉球大



質疑に答える講師とコメンテータ(左から神谷・奥村・植田・藤原の各氏)

大学工学部)より、「討議：沖縄県離島の台風時の交通途絶の事例を踏まえて」と題するコメントが行われるとともに、各講師が会場からの質問に答えた。

シベリアは、社会主義時代に開発が進んだが、計画経済の下で、政策的に多くの都市や村が建設された。しかし90年代以後、市場経済への移行の中で、その維持が困難となっている。一方沖縄の今帰仁村古宇利島は、離島のコミュニティが、橋で外部と結ばれたことによって変化を余儀なくされた事例である。このように断ち切れ、また繋がることは社会の変化をもたらす。繋がっていることを前提にした社会では、ガソリン供給に見られるように、途絶自体が大きな問題とならざるをえないのである。今回の講演会は、繋がっていることと途絶することの社会的な意味を考えさせるものだった。

(岡 洋樹)

「地域研究コンソーシアム2011年度年次集会・一般公開シンポジウム「情報災害」からの復興 ―地域の専門家は震災にどう対応するか―」

地域研究コンソーシアム(JCAS)の今年度年次集会一般公開シンポジウムは11月5日に大阪大学豊中キャンパスを会場として開催された。今回のシンポジウムは「『情報災害』からの復興」と題し、2011年3月の東日本大震



平川教授によるシンポ報告

災におけるJCAS加盟組織および各研究者の活動報告を通じて、地域研究の災害への対応を考える第1セッションと、より幅広い観点から「災害」を捉え、地域研究ならではの研

究アプローチを考える第2セッションの二部構成で行われた。シンポのテーマに掲げた「情報災害」は、被災に伴う情報網の機能不全、情報内容や媒体への信頼性低下、そして地域の知に関わる情報資産や伝承体系の喪失といった形で立ち現れる。こうした中で地域研究者にはいかなる役割が求められ、またどのような貢献が可能かといった点で興味深い報告と活発な討論が行われた。本センターからは平川新教授が東日本大震災の被災地における歴史資料のレスキュー活動についての報告を行い、歴史資料の被災による被災地の歴史記憶の喪失という「情報災害」への対応という面から、被災資料の救出・修復活動の実践を紹介するとともに、将来の災害に備えた歴史資料のデータベース化と情報の分散管理といった対策の重要性を強調した。

(上野 稔弘)

特別シンポジウム

「創造的復興に向けた未来都市のあり方」報告

「国立大学附置研究所・センター長会議」<http://www.shochou-kaigi.org/> は、全国の国立大学におかれた附置研究所および研究センターの所長・センター長が相互に緊密な連絡と協力を行うことによりわが国の学術研究の復興を図ることを目的とした組織です。現在、全国29の国立大学で62の附置研究所、27の研究センターがこの組織に加わっており、所属の教員数は3300名を超えています。本会議は理工学系、医学・生物学系、人文・社会科学系の3部から構成され、東北アジア研究センターは第三部人文・社会科学系に所属しています。

本会議では毎年、各部毎に専門分野におけるシンポジウムを開催していましたが、今回は本年度議長を務めている東北大学電気通信研究所中沢所長の提案により、三つの部会が合同で初めての特別シンポジウム「創造的復興に向けた未来都市のあり方」を2012年2月10日に仙台で開催し、東日本大震災の経験をふまえ我々が何をすべきかについて6件の講演が行われました。(以下講師敬称略)

「大震災後におけるエネルギー選択とエネルギー研究者に求められること」(京都大学エネルギー理工学研究所 尾形幸生)では今後の利用を考えなければならない原子力エネルギーの代替と、エネルギー源の選択は我々の責任であること、「安全・安心な核融合エネルギーの開発」(東京大学新領域創成科学研究科 小川雄一)では同じ原子力エネルギーの利用でも現在の原子力発電所が利用する核分裂と将来が囑望される安全な利用法である核融合の違いについて解説がありました。国際熱核融合実験炉ITER(イーター計画:ラテン語で道)は日本がイニシアティブをとって建設が進み、2050年までの商用炉の導入をめざしています。「ヒロシマから学ぶ放射線の人体影響と福島原子力災害の復興支援」(広島大学原爆放射線医科学研究所 神谷研二)は震災後、福島県立医科大学の副学長も兼務され、我が国では初期被爆対応医療機関から第3次対応機関まで

が定まっております。現在低線量被曝、内部被曝が大きな問題となっていること、一方で原爆被曝者の疫学研究は100mSvを超える高被曝によるものだけに限られ、福島で見られる低線量被曝の影響を今後研究する

の必要があり、また福島に健康増進の国際モデル地区とすべきであると主張されました。「国際沿岸海洋研究センターの復興と地域の再生」(東京大学大気海洋研究所 大竹二雄)は岩手県大槌町にある研究所が町の宝であり、第3次補正予算で開始され、東北大学が代表となる東北マリンサイエンス拠点形成に参加することの説明がありました。第三部会を代表し、東北アジア研究センター平川新教授は歴史資料のレスキューのこれまでの活動と、本年4月に本学に新設予定の災害科学国際研究所を含む東北大学の取り組みについて説明されました。最後に「大震災・復興に対して社会科学系の研究所ができること」(東京大学社会科学研究所 末廣昭、佐藤慶一)では新日鉄の高炉が停止した後の釜石を対象とし、法学、政治学、経済学、社会学が結合し、釜石の「希望学」を開始したところに震災が発生し、行政では対応できないような避難住民の意識調査やデータアーカイブの形成などの実践について紹介がありました。

シンポジウムには160名以上の参加者があり、多方面の分野を網羅する研究所のもつポテンシャルを感じていただけたのではないかと感じています。なお、2012年度の第三部会長を東北アジア研究センター長が務めることとなっており、現在シンポジウム企画など進めているところです。(東北アジア研究センター長 佐藤 源之)



広島大学原爆放射線医科学研究所 神谷研二先生

シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット特別講演会

「ロシア葬礼泣き歌に現れる他界観：

北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き歌をてがかりに」

2011年11月25日(火)に、東北大学文学部315室において、シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット特別講演会「ロシア葬礼泣き歌に現れる他界観：北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き歌をてがかりに」が開催されました。



特別講演会のポスター

講師の中堀正洋先生は慶応義塾大学非常勤講師で、スラブ民俗学および文献学を専門とされ、ロシア北部地方を中心とした葬礼泣き歌の比較研究、ロシアとフィン・ウゴル系民俗の口承文芸の比較研究といった項目について研究されています。

講演会ではまず泣き歌について、世界の民俗や歴史的背景に

おけるロシアの泣き歌の位置付けについての概説がありました。さらに泣き歌の天才と呼ばれた泣き女、フェドソヴァの人生と歌について、実際の音声を交えながら詳しいお話しをしていただきました。そして泣き歌の歌詞の分析からは、ロシア民衆の生活や他界観といったものが読み取れるという指摘がなされました。

次にこの講演を受け、東北大学文学部の准教授でセンターの兼務教員でもある山田仁史氏が、人間の自然な感情・身体と、その文化的・儀礼的表現としての「世界の泣きの文化」論のユニークさを指摘、一方で文化としては見落とされやすいものでもあり、これまであまり研究の対象とされてこなかったことから今後の展開が期待されるとコメントされました。

講演会の後に行われた懇親会でも多くの質問や議論が交わされ、シベリア地域の民俗についての理解を深めるという点でも実りある会になりました。(山口 未花子)

東北アジア研究センター・シンポジウム

「聖典とチベットー仏のことはを求めて」



奥山直司教授による講演

2011年度の東北アジア研究センター・シンポジウムは、東北大学大学院文学研究科の後援のもと東北インド・チベット資料研究会と連携し、「聖典とチベットー仏のことはを求めて」というテーマ

で2012年2月19日(日)に東北大学片平キャンパス・さくらホールにて開催されました。古来より「仏のことは」はチベット、モンゴル、中国、朝鮮、日本という東北アジア各地域とインドとを結びつけてきました。なかでもチベットに縁ある文物として、東北大学には、タンカ(仏画)・佛像などの河口慧海コレクションと、デルゲ版チベット大蔵経をはじめとする多田等観将来資料とが所蔵されています。これらの世界的にも貴重なチベット資料を齎した河口慧海と多田等観という二人の入蔵僧の思想・動向に焦点を当てながら、インド・チベット学、美術史学、文化史学、日本思想史学、ネパール研究それぞれの領域から「仏のことは」としての聖典伝承を総合的に明らかにしようとする講演・研究発表が次のように行われました。

- 13:00 開会の挨拶 佐藤源之(東北大学)
- 13:05 趣旨説明 菊谷竜太(東北大学)
- 13:20 講演① 奥山直司(高野山大学)
「河口慧海による梵語・チベット語仏典の収集とその意義」
- 14:20 講演② 長岡龍作(東北大学)
「日本美術史研究者にとっての河口コレクション」
- 15:20 ブレイク
- 15:30 発表① 高本康子(群馬大学)
「多田等観関連資料の現在」
- 15:50 発表② 菊谷竜太(東北大学)

「インド仏教聖典の翻訳とチベット大蔵経の形成」

- 16:10 発表③ 井内真帆(日本学術振興会)
「蔵外文献をめぐる学界動向と日本所蔵蔵外文献の活用に対する提案」
- 16:30 発表④ 吉崎一美(ネパール研究者)
「河口コレクションとネパール仏教」
- 16:50 ブレイク
- 17:10 パネリストによるセッション
司会 桐原健真(東北大学)
- 17:50 閉会の挨拶 岡 洋樹(東北大学)

河口慧海の入蔵目的である「梵語・チベット語聖典の探索」が当時の西欧を中心に高まっていた「大乘非仏説」に起因すること、コレクション収集過程における慧海とネパール仏教との関わり、さ



長岡龍作教授による講演

らには彼と五百羅漢寺・高村光雲との関係などが明らかにされました。一方、国内外における多田等観資料の内訳と共に、従来注目されていなかった多田写真資料が当時のチベット知る重要な一つの手掛りとなること、蔵内外文献を取り巻く最先端の研究動向および今後より効果的に資料を活用するための提言とが示されました。本シンポジウムではさまざまな形態をもつ「聖典」が、その伝播過程においてアジア各地域の文化を集積した言わば文化の綜合体としての「仏のことは」であり、そのため複数の領域に渡った多角的なアプローチが聖典研究には必要不可欠であることをあらためて明示できたと言えるでしょう。

(東北大学大学院文学研究科専門研究員 菊谷 竜太)

第10回特別推進研究

「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金 特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」プロジェクトでは、センターの共同研究と共催で、平成23年12月3日(土)に東京の慶應義塾大学三田キャンパスにて第10回目の研究会を開催しました。

今回の報告は、清の宮廷演劇、内廷蔵書、そして人民共和国での演劇文献に係る内容で、同時に関連文献の共同調査研究も実施しました。

- 開会(明清内府本・宮廷演劇本及び特別推進研究の報告)
磯部 彰(東北大学)
- 研究発表I 「『中国地方戯曲集成』の編集出版について」
陳 仲奇(鳥根県立大学)

斯道文庫所蔵文献共同調査

研究発表II 「節戯について」 磯部 祐子(富山大学)

研究発表III 「清宮蔵書について」

高橋 智(慶應義塾大学)

総括

今回、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の高橋智先生のはからいで、斯道文庫所蔵の明清内府刊本を中心とした文献の共同調査を行なうこととなり、『永楽大典』零葉や『四庫全書』零本などの善本、書庫内にある稀観本など、多種多様な東アジア善本を眼にすることが出来ました。さすが150年を越える歴史を持つ慶應義塾には、書香も薫り高い様子がうかがえました。(磯部 彰)

シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット 主催写真展「北にくらす子どもたち」(於東北大学図書館本館)開催の報告

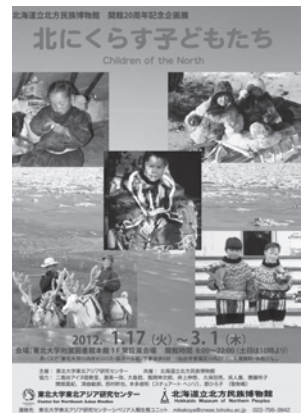
1月17日(火)から3月1日(木)までの日程で、ユニット主催の写真展が開催されました。この展示は、北海道立民族博物館の開館20周年に合わせて企画されたもので、博物館関係者のご厚意により東北大学附属図書館での巡回展が実現しました。北方民族博物館と東北アジア研究センターは研究協定を結び、様々な相互協力を行っています。今回の展示もその一つとして位置付けられます。

ユーラシアと北米大陸の北方地域には、近代国家による国境がひかれる以前から多くの先住民が暮らしており、人類学者たちはそれらの人々を対象とした研究を行ってきました。写真展で展示されているのは、これらの地域を調査研究する人類学・言語学者達が、フィールドワークのなかで撮影した民俗写真のうち、とりわけ子どもの写真です。厳しくも美しい自然環境や伝統的文化から、現代の子ども

をめぐる環境までさまざまな側面の日常が写されています。

数々の写真を通して北方地域の民俗世界の過去と現在の暮らしを知り、関心を持っていただければと思います。また、この写真で子どもたちが見せてくれた笑顔が続くよう、次世代に何を伝えていけばいいのか思いをめぐらせていただける契機となれば幸いです。

(山口 未花子)



写真展「北にくらす子どもたち」ポスター

◆ センター客員教授紹介 ◆

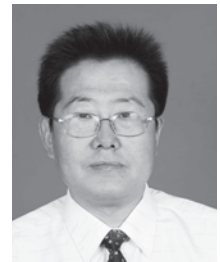
オトゴン (敖特根) 教授

2012年2月1日より4ヶ月間の予定で、中国西北民族大学のオトゴン (敖特根) 教授が本センターの客員教授として着任された。オトゴン先生は1965年生まれ、内蒙古自治区出身のモンゴル族で、現在は西北民族大学の蒙古語言文化学院に所属している。モンゴル語文献学、特にモンゴル語古文書の研究を専門としている。

中国で西北地域と呼ばれるのは、中国内陸部の黄土高原西部、渭河平原、河西走廊、西藏高原北部、内モンゴル高原西部、ツァイダム盆地、新疆の大部分の地域をさし、西北民族大学は、この地域における中国の少数民族研究の中心となっている。同大学の蒙古語言文化学院は、中国西北地域、とりわけ甘肅省、青海省におけるモンゴル族の言語文化研究を積極的に進めている研究機関であり、オトゴン

先生は、蘭州市を基点として中央アジア方面へと伸びる河西回廊を中心とする西域の歴史におけるモンゴル民族の活動を文献学的観点から研究している。とりわけ、2010年に中国民族出版社から出版された『敦煌莫高窟北区出土蒙古文文献研究』は、敦煌莫高窟から新たに発見されたモンゴル語文書を解説し、斯界で高い評価を得た著作である。

本センターに滞在中は東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニットの活動に参加して「敦煌モンゴル語文献学の研究」をテーマとして研究を行っている。(栗林 均)



セレーネン・ジャルガラン教授

2012年2月1日から3ヶ月間、モンゴル科学技術大学地質・石油工学研究科探鉱学科長のセレーネン・ジャルガラン(Sereenen JARGALAN)教授が東北アジア研究センターの客員教授として赴任している。地球化学研究分野の石渡研究室で地質学、岩石学、鉱床学(資源地質学)分野の研究を行う。彼女は東北大学大学院理学研究科の修士・博士課程を修了し2002年に博士号を取得した。彼女は在学中の2001年に青葉理学振興会賞を受賞し、2007年にモンゴル鉱物資源エネルギー省から最優秀地質学者賞、2010年には同文部科学省から最優秀科学者賞を受賞している。彼女は日本語に堪能で、英語・ロシア語にも通じ、モンゴルの地質関連学界・業界の対外的な窓口としても大活躍している。日本の多くの大学の地質学関連のモンゴル調査隊が彼女のお世話になっており、昨年モンゴル資源地質学会のバットエルデネ会長が訪日された際には通訳を兼ねて同行した。また、昨年9月に私が学生の現地地質調査指導のため訪れた際には、彼女の計らいによりモンゴル科学技術大学でオフィオライトや東日本大震災について講演する機会を得た。

彼女の従来の研究対象は主にモンゴル造山帯の花崗岩とそれに伴う金鉱床であったが、今回の来日ではモンゴル西部のバヤンホンゴル・オフィオライトなどの苦鉄質・超苦鉄質岩とそれに伴う銅、クロム、ニッケル、白金族元素などの鉱床を研究する。鉱物の電子線マイクロプローブ(EPMA)分析などは理学部で行うが、通常は当センターの客員教授室(422)で執務する。

ジャルガラン教授の娘さんは東京にお住まいで、息子さんはモンゴルで日本の会社にお勤めとのことで、日本とのつながりは非常に深い。また、2010年9月に当センターを訪問されたゲレル教授(本ニューズレター47号4頁)も同じ地質・石油工学研究科に所属しており、同研究科と当センターの関係も深い。ジャルガラン教授の滞在中、多くの当センター教職員・学生が更に交流を深めていただきたい。(石渡 明)



第1回「日露人文社会フォーラム」

ー グローバル化時代における日露学術交流の可能性 ー

2011年12月8日と9日にモスクワ大学で、第1回「日露人文社会フォーラム」が開催された。このフォーラムを主催したのはモスクワ大学と東北大学であるが、日本側からは本学だけでなく、北海道大学、東京大学、東京芸術大学からも研究者が参加した（詳細はHPを御覧下さい。http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/news111128_01.html）日露の学術交流では、理系の研究交流が中心となり、文系の研究交流は盛んではない。ロシアを研究する日本人研究者や、日本を研究するロシア人研究者は、文系でも日露交流を行っているが、それ以外の領域に広がらない。この



開会式の模様。左から石瀬公使（日本大使館）、セミン副学長（モスクワ大学）、木島総長補佐（本学）

フォーラムの原案は、モスクワ大学心理学部のジンチェンコ学部長により提案された。2010年、モスクワ大学の心理学部で日本語を教えていた鳩山講師（現在、センター客員准教授）から、木

島総長補佐にフォーラム案が提案されたのが開催の契機となる。その後、セミン・モスクワ大学副学長の賛同により、このフォーラムにモスクワ大学の文系全体で取り組むことになった。ロシア側ではロムチャンコ氏（モスクワ大学本部）が、日本側では塩谷がコーディネーターを務めた。

初日は人文系に焦点を当て、芸術、哲学（死生学）、文学、外国語教育、心理学の5部門を設定し、初日の最後に全体討論を行った。二日目には社会科学系に焦点を当て、都市と交通、経済学、高等教育の3部門を設定した。部門毎に日本人研究者とロシア人研究者が研究報告を行った。通常、この種の国際フォーラムでは、英語で行われることが多いが、今回はモスクワ大学の日露通訳の御協力により、日露の研究者が基本的に、母国語で報告した。専門分野毎の研究會や学会は珍しくないが、このような人文社会系の様々な分野が合同でフォーラムを開催するのは稀である。日露の研究者同士で、それぞれの研究領域を超えた、学際的な議論が行われた。このフォーラムの成果は、2012年の秋までに英文で刊行される予定である。このフォーラムを機に、日露の人文社会系の学術交流が活発になることを期待したい。第2回の「日露人文社会フォーラム」は、2013年に日本で開催される予定である。（塩谷 昌史）

著書紹介

センター関連出版物

東北アジア学術読本および東北アジア研究専書の発刊について

編集出版委員会は、従来「叢書」「報告」といった非売品の出版物の刊行を行ってきましたが、2011年度より、広範な専門家・一版読書人にむけて研究成果を発進するため市販の出版シリーズ二種類を新たに創刊しました。

「東北アジア学術読本」は、地域の自然・歴史・文化・社会に関わる基盤的知見や、人文社会科学・理工学の多面的な視点から切り開いてきたアクチュアルな諸問題にかかわる研究成果を、広く知ってもらうことを目的とするものです。学術をわかりやすくという理念の下、東北大学出版会から刊行されています。

もう一つは専門家・知識層や大学生等を対象にした「東北アジア研究専書」です。当該分野はもちろんのこと関連する分野の研究者・学界、広範な読者層にアピールすることを通して、東北アジア研究が切り開く学知としての可能性を社会にむけて発進することを目的としています。出版社は特定せずそれぞれの専門分野に応じた形での刊行を行います。（高倉 浩樹）

○東北アジア学術読本（いずれも東北大学出版会刊）

・1号 シベリアとアフリカの遊牧民ー極北と砂漠で家畜とともに暮らすー / 高倉浩樹・曾我亨 2011年12月

シベリアとアフリカという厳しい環境の中で人間はどのように生存を可能にするのか、遊牧民であるエヴェンとガブラの伝統文化の魅力をわかりやすく紹介する。両地域全体像や、トナカイやラクダという家畜とともに暮らす人々の生業技術・社会の仕組みを詳らかにする。彼らの生活は、市場経済と開発・民族紛争や難民問題といった現代国家の矛盾の最前線に位置している。これらの点をふまえ人々の生き方の希望と苦悩を描写する。（高倉 浩樹）

・2号 東北アジア 大地のつながり / 石渡明・磯崎行雄 2011年12月

本書は2009年12月5日に開催された東北アジア研究センター公開講演会「日本と東北アジア 大地のつながり」の内容に基づく。「日本と中国・朝鮮の地質のつながり」（磯崎）と「日本とロシア東部の地質のつながり」（石渡）の2章からなり、質疑応答の内容も記録されている。本書はAmazon等のネット書店でも購入できる。蟹澤聰史氏によ

る書評が日本地質学会のメルマガ geo-Flash の162号に掲載され、一般人も同学会ホームページ上で閲覧できる。

(石渡 明)

○東北アジア研究専書

- ・1号 近現代中国における民族認識の人類学 / 瀬川昌久編 (昭和堂) 2012年1月

平成17年度～21年度実施の東北アジア研究センター共同研究「中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証—中華民族多元一体構造論を中心に—」の研究成果。本センターの瀬川教授ならびに上野准教授をはじめ、中国でのフィールドワーク経験の豊かな8名の研究者が、費孝通の理論を軸に、近現代中国における民族認識と民族間関係の実態を論考したもの。センター企画の市販学術書シリーズ「東北アジア研究専書」第1弾である。

(瀬川 昌久)

- ・2号 極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌 / 高倉浩樹 (昭和堂) 2012年1月

シベリア・タイガで牛馬飼育を営むステップ起源の民族サハ。その生業文化を人類進化論的に位置づけつつ、社会主義から市場経済そしてグローバル化にいかに対応し、その文化的多様性を維持しているのか分析し、生態・社会環境の変化に対応する生業複合のメカニズムを解明した。ポスト社会主義人類学の視座からの地域研究的な記述説明と、文化史的な長期の時間の視座からの理論的説明を組み合わせた点に特徴がある。

(高倉 浩樹)

○東北アジア研究叢書

- ・41号 白頭山火山とその周辺地域の地球科学 / 谷口宏充編 2010年12月

本書は2000年度から行われた中朝国境の白頭山を対象とした国際共同研究の成果のうち、主として叢書16号発表以降に得られた地球科学的知見をまとめた論文集である。本論文集では10世紀巨大噴火を中心に、白頭山や蓋馬溶岩台地における過去の火山活動ばかりか、最近、白頭山で発生している活動の活発化に関しても論述している。本書には北朝鮮から寄せられた2編を含め、計11編の原著論文とレビュー論文が掲載されている。(谷口 宏充)

- ・42号 高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊<全像三国志伝>原典と解題(上) / 磯部 彰編 2011年2月

- ・44号 高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊<全像三国志伝>原典と解題(下) / 磯部 彰編 2011年3月

鄭雲林出版の『全像三国志伝』は、東アジア出版文化研究及び中国文学研究の基本となる明刊本三国志伝の一種で、かつては京都大学以外には、世界に存在しないと言わ

れた。本書には、その鄭雲林刊本の完全本である高岡市立中央図書館所蔵書の影印資料が収められる。京都大学本には欠葉が見られるとともに、本書とは同版でない部分もある。原本は簡略本の系統に属し、明朝後期、福建省の建陽で出版された木版本である。三国志演義の研究上、日本にのみ残る重要な文献である。内容は、資料本体と鄭雲林刊本の書誌、及び、建陽の書林鄭氏一族の研究から成る。製本の都合上、上冊・下冊二分冊に分け、序及び巻1から巻10と解題資料を上冊に、巻11から巻20までを下冊に収めている。震災直前に完成したが、保管建物の崩壊と雨漏でかなりの部数が損傷した。(磯部 彰)

- ・43号 ノマド化する宗教、浮遊する共同性—現代東北アジアにおける「救い」の位相 / 滝澤克彦 編 2011年2月

本書は、2009年2月に行われたシンポジウムをもとに編まれた論文集である。鈴木岩弓氏の基調講演を始め、モンゴル・韓国の各セッションとコメントおよび総合討論で構成される。ここでは、冷戦構造崩壊後の東北アジア地域の社会変化と信仰実践の関係について分析が行われ、既存の宗教と新たな信仰を巻き込み「ノマド化する宗教」が、ローカルとグローバルの二分法に還元できない「浮遊する共同性」を創出していることが確認された。(滝澤 克彦)

- ・45号 歴史の再定義—旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育 / 岡 洋樹編 2011年5月

本書は、平成22年2月に開催された同名の東北アジア研究センター・シンポジウムの報告論文集である。このシンポジウムは、平成19～21年度実施の共同研究の成果として開催されたもので、本書にはモンゴル、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、ロシア連邦サハ共和国の現地研究者と日本側研究者による、ソ連圏解体後の旧ソ連圏諸国の歴史認識・教育の動向を論じた論文十篇及び中国の状況を論じたコメントが掲載されている。(岡 洋樹)

○東北アジア研究第15号 (2011年2月)

掲載論文

JO Sam-Sang, Identity Crisis and Ideology : Meiji Japan's Illustration, 斯欽巴図『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語の語彙的特徴, 張政「オロチョン村の形成と社会集団構成の変化」, 蝦名裕一「仙台藩における内分大名の成立—一関藩と岩沼藩を事例に」, 寺山恭輔「戦前期ソ連の対日政策—既刊史料集の再検討」

書評

塩谷昌史「赤嶺淳『ナマコを歩く—現場から考える生物多様性と文化多様性』」



震災からの復旧

東北アジア研究センター 環境情報科学研究分野 教授 工藤 純一

2011年3月11日はモスクワ大学からの帰途で新幹線はやて29号の中で被災した。場所は宇都宮と那須塩原の中程で、おそらく最高速度275km/hで走っていたと思われる。2度ほど車輪が線路から離れるような大きな衝撃音と傾きの直後に右から左へ大きな力が掛かり、右側の荷物棚から全ての荷物が放り出されるのを目の当たりに見た。よくぞ脱線転覆しなかったと、技術力の高さに感心した。それから仙台に辿り着いたのは2日後の3月13日の夕方だった。すぐさま研究室へ行って見たが、建物の周囲には規制線が張られており、中に入ることが出来なかった。

研究室の惨状は相当なもので壁には縦や横に亀裂が走っていた。これは小手先の対応でなんとかなるものではないと判断して、片平キャンパスに代替研究室を設けて頂いた。この原稿を執筆している時点でも研究室は未だに修復されていない。

工藤研究室で最も被害が大きかったのは衛星受信システムである。これまで、前職の大型計算機センター(現在のサイバーサイエンスセンター)から引き継いでいた気象衛星NOAA、平成21年の補正予算で導入して頂いた衛星観測解析システムで受信しているMODIS、MTSAT(ひまわり)の3つの受信に支障をきたした。さらに、関連するデータベースやサーバシステムにも障害が発生し、使用不能の状態に陥った。

NOAA受信については既に機器製造から18年が経っているため補修部品が存在しないため廃棄せざるを得なかった。MODIS受信についてはソフトウェアとハードウェアの双方に障害が発生した。図1は震災後に通電が可能になってから得られたディスプレイの画面である。中程のデータ欠損は正常な受信ができてい

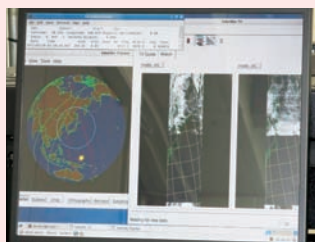


図1 MODIS受信モニタ画面(2011年3月30日)

ないことを示している。MTSAT(ひまわり)は被災を受けた川北合同研究棟の屋上にアンテナを設置していた。このアンテナは固定した状態で使用しているが、図2のように、得られた画像を見るとデータ欠損のあることが分

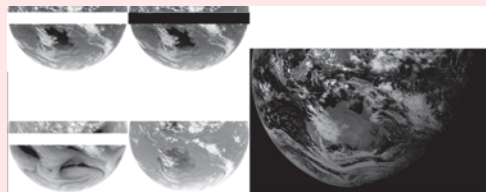


図2 MTSAT(ひまわり)からの受信画像(2011年5月16日)

かった。

画像データベースについてはNOAAデータを地域別に切り出して画像化したもので、1990年から毎日のデータが蓄積されている。しかし、運用しているサーバに障害が発生したので一部のデータが消滅した。

しかし、ありがたいことに関係各位には本当に親身になって復旧に協力して頂いた。NOAA受信については、本学青葉山から2km程離れた東北工業大学の受信局からデータを分けて頂くことにした。この大学も相当の被害を受けたため、受信装置の一部を修復する必要があった。これには、当時の納入業者が協力してくれた。また、受信データの形式が異なるのでデータ変換ソフトの開発を東北工業大学に行ってもらっている。さらに、欠損したデータについては農林水産省農林水産研究情報総合センターと調整しているところで、なんとかリカバリできそうである。

一方、科学技術振興機構(JST)からは、画像データベースの復旧に関わる予算を賜ったのでサーバの再構築やデータ入力等を行っている。また、第3次補正予算により、衛星観測解析システムの復旧を開始した。寒風の吹きさらす真冬に業者の方はアンテナの修理に取り掛かっていた。予定では年度内の復旧を目指している。

今後は、昨年10月28日に打ち上げられ現在試験調整中のNPP衛星がもうすぐ受信できるようになるので、これまで同様に画像データベースの充実を図りたい。衛星画像は環境災害の観点から長期的かつ連続的な観測に利用されている。また、森林火災や地震等の解析にも利用されている。現在得られる分解能は最大で250mであるが、将来的には1メートル以下の高分解能データも受信できるようになれば、研究教育にとってさらに新たな利活用が期待できる。そのような方向を目指したい。



瞬く間に春夏秋冬が過ぎ、「3・11」がめぐってきた。寒さと真っ暗闇の中で絶え間のない強い余震に怯え、一日中沿岸部の惨状を伝えるラジオだけを頼り、食糧が尽き果てることを本気で恐れたあの頃を思えば、現在の仙台は一見復興を遂げたかに見える。しかし、学内の至る所で地面にも建物の壁面にも亀裂が走り、それは幾万遍もの余震を経てむしろ大きくなっている。まだ油断することも安心することも決して許されないと私たちは日々自戒せねばならない。(柳田 賢二)